ヒ
特別
12

室鳩巣義人録稿本略解説

一　元祿中、赤穗四十七士報讐の義擧たることは、遍く世人の知る所にして、今更めて之を縷説するを須たさるなり、但報讐の當時にありては、士大夫及ひ學人の間に於て、往々異論あり、之を是とするものあり、之を非とするものあり、是非の論、混々として湧き興り、未た一定せさりしに、先哲室鳩巣氏義人録を著すに及ひて、時人始めて之を認めて義擧とし、近世に至り、人皆翕然として四十七士を以て義士と稱するもの、蓋し鳩巣氏に

始まりしと云ふ、

　義人錄の世に傳はるもの、刊本あり寫本あり、凡へて若干種、之を參互讐校すれは、異同鮮からすとす、然るに鳩巢氏の草稿本一部、前田侯爵家の尊經閣に現存す、蓋し義人錄の書の體裁たるや、先つ四十七士報讐の始末を委曲詳敍し、その用筆懇到周匝にして、惻々として人を動かすものあり、後に四十七士各人の小傳を載せ、并せて各人に關係せし節婦義僕の事迹行爲に及へり、故に四十七士の事實を知らんと欲せは、此書を一讀すれは、先つ其梗概を知り得へし、而して尊經閣現存草稿本は、先つ端楷を以て一部を淨錄し、而して之を改竄し、之を塗抹し、或は餘白に文字を記し、或は紙片を糊付して、以て文章を補ひ、洗練是正する所頗る多し、而して此本を以て、各種の刊本寫本と參互對比するに、是れ亦異同出入あること鮮からすとす、蓋し此本も、猶未定の草稿たれはなり、然れとも當時鳩巢氏苦心の迹を徵するに於ては、據りて以て窺ふに足るものありとす、

二

　因て今本財團に於て、之を原本と同一に摹製し、之を學人に頒ち、以て其考勘に資し、并せて鳩巢氏苦心の迹を徵するの一助と爲す、鳩巢氏は、正德享保間有名の碩儒にして、其仕履始末及ひ學術の流派を記するもの、行狀、傳、野史、先哲藂談、近世藂語

等あり、野史の儒林傳稍詳備し、且要を得るに似たるを以て、左に錄して之を示す、儒林傳に云ふ、

室直清。字師禮。一字汝玉。小字順祥。號滄浪。命齋曰靜儉。江府人。其先出自丹治氏熊谷直實。直實次子直秀。直秀始食邑於備中英賀郡。稱族室氏。蓋因地名也。高祖某稱大和守。曾祖某字孫三郎。相繼仕尼子氏。祖某亦字孫三郎。仕尼子氏。後仕宇喜多氏。父玄樸。號草菴。以剛直不遇於世。適攝津。遂徙居武藏。生直清于谷中。直清小字孫太郎。幼而聽悟。有老成之風。寛文十二年春。參議前田綱紀召講大學章句。時年十四。綱紀嘆曰。眞英物也。乃祿之。令就學京師。有神童之稱。又遊木下順菴之門。順菴每稱曰。師禮忠信篤敬。有志聖學。吾益友也。稍長。慨然以道自任。於功名富貴。無一動其心。泊如也。又從羽黑成實學。成實之學。出於山碕闇齋。以故滋明經義。貞享三年夏。遷加賀。改稱新介。元祿中。直清在加賀。得永氏廢宅在城西者。買而居焉。號鳩巢。士庶皆矜式。奇材偉器。往往出其門。著大學新疏。發明章句之蘊。又著義人錄。正德元年三月以新井君美薦。文昭公辟爲學職。適朝鮮人來聘。受命與學士李礥等。唱和于客館。時君美寵遇尤盛。政事悉決君美。盛名赫赫。士衆翕然推之。直清寄書誡焉。無幾公薨。君美遂不終其志。正德三年春。賜邸于駿河臺。稱以駿臺。有德公繼。統領高倉館教授。府下翕然嚮慕。受業者日衆。擢爲侍講。公屢咨詢政事得失。此職之設。蓋始于此。享保七年三月。特召講

尚書。迄九年秋。屢引見。講貞觀政要。嘗受命。疏五倫五常名義。記以國字。述六諭衍義大意。府命鏤之。布天下。直清嘗著論孟中庸及易經廣義。未及考訂。罹災而亡。復感末疾。不能重屬稿。陳疾乞老者再三。優命不允。猶帶職名。家居。以頤養爲事。每吟上蔡詩云。透得利名關。方是小欲處。人喩得此句。則終身可以無憂矣。日夜研窮典籍。未嘗休止。疾痛之甚。人所不能堪。而處之裕然。略無戚容。患伊藤仁齋荻生徂徠之徒。妄非毀程朱。敢肆其邪誕。而無忌憚也。嘗曰。大廈之傾。非一木所支。然而辨別邪正。明章眞僞。使學者莫迷所歸嚮。此吾志也。其不信於今。必有傳於後乎。於是著駿臺雜話。時學風漸變。橫議載路。詭譎儉薄之言。聳動人聽。擧世靡然。淳風幾息。以故直清謝絕生徒。掃迹自守。蓋得否亨之道矣。然有篤志來請者。不復甚拒。力疾指教。諄諄乎。各因其材而篤焉。著太極圖述。弘闡精微。俟後學乎來世。是先生之絕筆也。直清堅守朱學。深惡當世好立異說者。以維持名教爲己任。與徂徠之徒互相輕。平金華一日來見。出其得意文一篇視之。且求刪正。直清讀一過稱善。强乞正。乃削二十字。更增五字。金華不懌而去。明日質諸南郭。南郭不得決焉。質諸徂徠。徂徠視直清所竄改者曰。如此而後成文。於是其徒始重直清。又有文集後編補遺合四十二卷。享保十九年八月歿。年七十七。子洪漢字孔彰。繼父業仕幕府。

昭和九年十二月

巳
特別
12